

# 東レ株式会社

2019年3月期 第3四半期決算説明会  
質疑応答要旨

日時：2019年2月8日

説明者：代表取締役社長 日覺 昭廣

本資料中の業績見通し及び事業計画についての記述は、現時点における将来の経済環境予想等の仮定に基づいています。  
本資料において当社の将来の業績を保証するものではありません。

<全般>

Q. 今回200億円の営業利益下方修正を行ったが、主な要因として中国減速の影響があり、繊維や機能化成品セグメントが影響を受けているように見える。中国市場につき、減速の影響を受け始めた時期、その影響の度合い、またいつ頃回復を見込んでいるのかについて教えて欲しい。

A. 中国市場で影響を大きく受けたものとしては、マレーシア子会社の ABS 樹脂が挙げられる。米中貿易戦争の影響によりユーザーが中国の事業を縮小させるという動きが出ている。このような動きは3Q から始まり、4Q も継続している。

また、スマートフォン販売減少の影響を受けた。11月の説明では新機種が10月に発売され、この売れ行きが業績を左右するという話をしたが、この要素に加え中国市場のスマートフォン販売も大幅に減少した。中でも当社の販売する材料は有機 EL 等高機能機種に採用されているものが多く、これらの売上が急激に減少し、材料メーカーへの発注が止まってしまった。前回の説明会でもこうした状況の兆候が出ているという話をしたが、その状況が現在も継続している。

<繊維>

Q. 繊維セグメントは、今回年間見通しを引き下げたことに加え、これまで増益基調で推移していたものが、3Q だけ見ると営業利益も前年比減益に転じている。説明の中では中国および景気の減速が理由とのことだったが、もう少し中身につき詳しく説明して欲しい。

A. 前回見通しでは、販売が順調に推移することを見込んでいたが、その後中国・欧州等の減速感が出てきていることから、見通し並みの販売量が見込めないと判断した。エアバッグ用基布も、メキシコ工場の稼働が開始し販売が大幅に伸びると見込んでいたものが、自動車関連が若干停滞気味で思ったほど伸びていない。

紙おむつ向け PP スパンボンドも韓国の設備を増設し販売拡大を見込んでいたが、潜在的な需要は大きいものの、足下ではそれほど販売は伸びていない。

エアバッグ、PP スパンボンド共に増収増益ではあるものの、需要停滞気味のものも多く、今回営業利益見通しを60億円下方修正した。

<機能化成品>

Q. 機能化成品の通期の営業利益見通しを100億円引き下げているが、ABS 樹脂とスマートフォン関連材料のうち、どちらの要因が大きいのか、イメージ感を教えて欲しい。

A. 電子情報関係がかなり大きく見通しから下振れた。スマートフォンの高機能機種に採用されている有機EL材料や高機能回路材料の急減の影響が大きかった。

フィルムについては、バッテリーセパレータフィルムは順調に推移している。スマートフォン用途のフィルムは若干の影響を受けているが、他の用途で挽回しているので、それほど大きな減益の要因にはなっていない。

ABS 樹脂については、中国の経済減速の影響を受けている。

営業利益見通し修正のうち、電子情報材料が5割、樹脂・ケミカルが3割というイメージだ。

Q. 機能化成品の3Q 実績と4Q 見通しを比較した場合の営業利益の動きを教えて欲しい。樹脂・フィルム・電子情報関連それぞれどういった見通しになっているのか？

A. 樹脂は特に中国における需要の急減があり、マレーシア子会社や中国のコンパウンド子会社が影響を受けている。2019年3月の米中摩擦の行方によるが、現在様子見で需要がシュリンクしているように思われる。2018年度下期からはASEAN 向けの付加価値品の販売拡大に注力しており、これから成果が出てくると思う。

原料価格が下落しているため、採算が改善していると思われるかもしれないが、安くなっている原料の効果を取り込めるのは2019年度の1Qからになる。

フィルムについては、スマートフォン関係の落ち込みが大きい。2018年度3Q 中盤以降、影響が出ており、4Qも継続している。バッテリーセパレータフィルムについては、まだまだEVの需要は堅調で、順調に販売は拡大している。前回説明会では2018年度上期に前年同期比20%程度販売数量が増えたと申し上げたが、年間では約30%増えると考えている。

電子情報材料も、スマートフォン高級機種向けの有機EL材料や高機能回路材料等が2018年度3Q 中盤から急減速しており、4Qもこの傾向が継続する見通しだ。但し、2020年になると5Gスマートフォンが発売されるため、2019年度下期頃から関連材料の販売が始まれば、利益に貢献すると考えている。

#### <炭素繊維複合材料>

Q. 炭素繊維複合材料セグメントで、ドイツのコンポジット子会社と新規連結した TenCate 社の状況について教えて欲しい。

A. ドイツのコンポジット子会社については、前回の説明会で2018年8月以降技術部隊を派遣し、ようやく目標とする生産量を確保できるようになったという話をしたが、12月にはこれから想定される最大の生産量を生産できるところまで確認できた。後は、2019年1-3月で更なる生産の安定化と効率化を図り、現地の要員だけで生産を行うということに取り組む。

TenCate 社の売上高の8割程度は航空機用途が占めている。現在かなりの数のテーマでスペックイン活動中であり、これらは2019年度に発現することは難しいが、2020年以降は次の機種に採用されることで順調に拡大すると考えている。

Q. 炭素繊維複合材料セグメントの3Qから4Qへの動きについて確認したい。増収・減益の見通しとなっているが、ボーイング787の14機/月体制によって増収に効いてくるのか？

A. 航空機用途は順調に最終需要も伸びているが、3Qから4Qにかけて特に大きな変化はない。産業用途では、Zoltekで2017年度末から順次立ち上げて来たマシンが2018年度4Qにはフルに効いて来る。また、利益面では、ドイツの子会社の費用が3Qから4Qにかけて増えるとしている。その悪化を見込んで、増収ながら若干の減益の見通しとしている。